

坂上田村麻呂が、朝廷の権勢を奥州まで広げてから、百二十年程、立つ……。しかし、まだ、奥州は、中央政府から孤立し争いをしていた。その中の最有力豪族が安倍氏である。そして、さきほどの毛皮をはじめ、砂金、名馬、昆布などを算出し、交易し、それを資金源としている。

安珍の住む白河は、いわば、奥州の玄関だ。

羽黒山の修験者は、修行僧として全国をまわりながら、その実……。奥州勢力のための活動を行っている……。

安珍の師匠が南坊という名前なのも、当時の奥州にとっての日本の南地域、すなわち……。熊野地域を担当している僧……。という意味だ。

したがって安珍も……。また、むろん、僧として的一般教養は身に付けていて、熊野への参拝を表向き目的としていたが……。それ以上に奥州の勢力の代表として、交易物の取り引き交渉と地域の情報収集を任務にしている。

奥州と熊野との間の取り引きは、その運搬を扱う清重にも利益をもたらす。

清重は、うれしそうに毛皮をながめていたが、ふいに、思い出したように安珍に顔をむけた。

「いかん……。いかん……。ひきとめてしもうた。希代に怒られるわ……。希代は、安珍殿が、来られるのをずっと楽しみにしとったんじゃ……。今頃、滝尻におるはずじゃ……。行ってやってくれぬか……。」

希代とは、清姫の幼名だ……。他の者は、姫と呼んでいるが、清重と清次は、ただ、希代と呼んでいる……。

安珍は、さつき、清姫とは下の淵であった……。と言おうとして……。やめた。なんとなく、もう一度、清姫の顔を見るのは悪くない……。という気がしている。

「今宵は、ちょっとした歓迎の宴を用意しておるからの……。楽しみにして下され……。」

安珍は、丁寧に礼を述べて退出した。



真砂の地に残る清重の屋敷跡